

ポスドク支援を目的に行われたセミナーで意見交換する  
若手研究者ら(京都市北区・立命館大)



# ポスドク社会に生かす

## 京の大学 就職支援推進

大学院で博士号取得後に任期制で働く「ポスドクター」(ポスドク、博士研究員)の就職支援に向け、京の大学が、若手研究者の能力開発を図るプログラムを推進している。支援する教員らは「せっかく育てた人材を埋もれさせないよう大学や社会を挙げて支える必要がある」と話す。

文部科学省科学技術・学術政策研究所の調査によると、全国にポスドクは1方人以上を数える。身分は大学院生と助手の間に位置づけられるが、任期が終了した後は行き先が限られ、就

## 講義法や研究費申請指導

職問題が表面化している。特に文系は依然厳しい。立命館大では、2007〜11年度に任期を終えたポスドクのうち、その後も就職できた人は4割にとどまった。若手研究者のキャリア設計を後押ししようと、13年度から、学内で人文社会科学系分野に所属するポスドク1年目の研究者を対象に、3年の任期終了後を見据えた支援プログラムを始めた。

初年度は計24回のセミナーを開催。大学の教職員が、講義や学会の発表の仕方、科学研究費の申請書作成手順などを指導し、ポスドク6人が修了した。OBを交えた座談会も行われ、若手研究者たちは「実践に役立つ内容もあり、分野は違っても同じ立場の人と意見交換できる良い機会になった」と言う。

新年度も内容を改善していく方針で、指導にあたるサトウタツヤ教授は「若手

研究者は人的なネットワークをなかなか築けない。学ぶ側の質も変化しており、将来の研究・教育や組織運営を担う人材を育てるためには全学の連携が不可欠」と指摘する。

国公立大もポスドク支援を模索する。京都大では09年度から、文学研究科がポスドクや博士課程を終えた後も大学院にとどまるオーバードクターを非常勤講師として任用し、学部の入門科目の講義を担当させ、授業検討会などで教育スキル向上を促す。

京都大高等教育研究開発推進センターの松下佳代教授は「大学院重点化で教授が増えた一方、若手のポストが減ったことに加えて、大学の経営難など構造的な問題もある。グローバル化で外国人教員も増やす傾向にある。研究者も今や研究室でたこぼ化してはいけいない」と話している。

(佐久間卓也)